

# グラントワ応援団通信

第17号

## 親しみのある風景画

トークボランティア 石田 彰

石見美術館にも遠来の客がある。トークをした中から二題。

七月の「水辺の風景」の時、鹿子木孟郎の『舞子の浜』の前で立ち止まった男性客が「どこから辺りを描いたんや」とつぶやいている。四十歳前後と見え、たこの客に話しかけた。「舞子をご存知ですか」神戸やから、毎日のように浜を見えています。大正初年に描かれた、帆かけ舟の浮かぶ澄んだ海の風景に、明石大橋が浜を圧する現代の風景が気になるようであった。九月の「洋画家たちの海外留学展」で、団体旅行を抜け出し

て一人立ち寄った、という婦人客は八十歳前後と見えた。ご自分が奈良の美術館でボランティアをしていたことがあるという話の終わりに、「どうぞお励みください」と言われた。一瞬、しつかり勉強せよと叱られたように聞こえたが、同じ経験者からの激励なのだと思いかえした。吉田博の『風景』を、渡月橋だとうなずいておられた。八十年近く近畿に住んでいるひとが納得されると、証拠はないのだが、嵐山の風景に間違いはないと思ってしまう。

2007年10月25日発行  
(事務局)

0856・31・1860

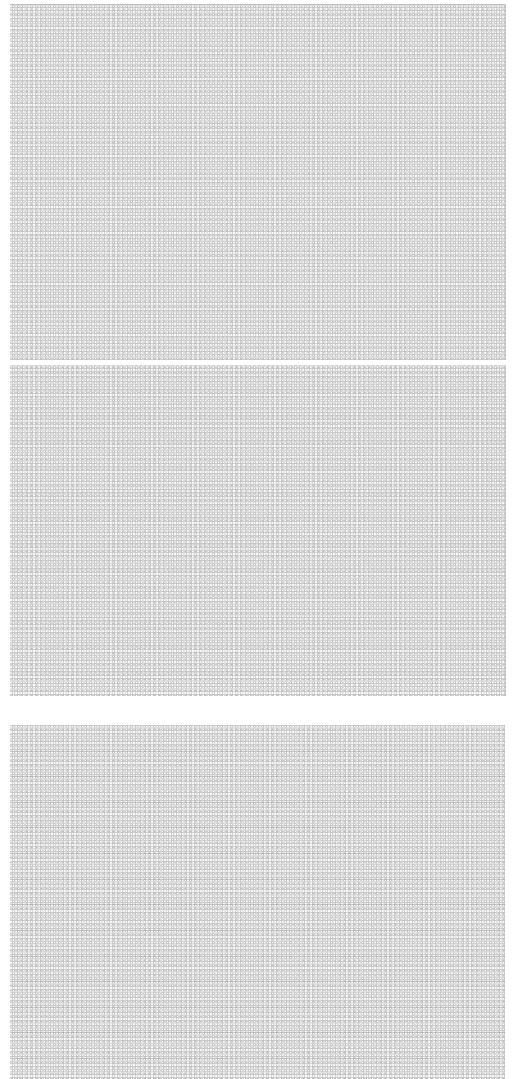
## ボランティア会員交流会

○写真は、澄川センター長を囲んでの集合風景。

十月十九日(金)十八時半、講義室でのボランティア交流会の集会に参加した。久しぶりにボランティア室に入るとAさんTさんFさんが今夕の交流会のバーベキューの準備で大わらわ。男性群が発奮して夕暮れの中、バーベキュー焼き、美味しい匂いが漂ってくる。そして、会の開始、澄川喜一センター長さんのお話。「東京にないものが、ここ石見にあります。」本物ってなんだろう。「新鮮な野菜、生きのいい魚、日本海、高津川、山々、そしてそこに住む住民の素直な心」です。それをグ

ラントワに活かすこと。同感。ここに来れば本物に会えるよ。触れるよ。会食では、旧知のボランティア人、新顔の人、館のスタッフの皆さんと、日頃の苦労話に話を沸かせ楽しい一時を過ごした。この交流会があつたからこそ、ボランティアたちの心のつながりが、一層親密になった気がする。またありますよ。是非参加しましょう。

(T・A)





二周年記念イベント「きんさいデー」

— 十月七日の風景写真 —

- 右より ▼お茶会・県知事さん参加 ▼保育園合唱
- ▼フォーゲルライン ▼ヨットレース ▼陶芸実演
- 中央下 ▼紙飛行機製作
- 左より ▼開会セレモニー ▼かえっこバザール
- ▼瓦絵製作

豊かに時を過ごしたい

情報ボランティア 洗川光廣

二周年記念イベントに参加して、感じたことは、「グラントワー」の建物自体が益田市の中心街の街角的な機能をもっていたということ。回廊を街の通りとして、「きんさい広場」や水盤の周辺は野外でのイベント会場としての雰囲気があり、陶器市や軽食コーナー、ヨットレース、各種イベントが行われました。回廊周辺の大ホール、中ホールのホワイエでは、広い空間を活かした紙飛行機飛ばしや茶会等多彩なイベントがあり、多数の人々で賑っていました。

美術館の入り口のホールでは、市内各地域の保育園の親子合唱が入れ替わりで行われ、大勢の親子で周辺回廊はあふれていました。多目的ギャラリーではプラモデルの組み立てに親子で参加し、真剣に取り組んでいる姿が見られました。真夏の厳しい中、ボランティアスタッフが自分の出来る時間帯で、お揃いの白いジャンパーを着て、各所でボランティア活動を楽しみました。

さすがに「グラントワー」は、近代的な建物で都会的な街角の雰囲気もあり、開催されるいろいろなイベントや展示は素晴らしく興味深いものでした。これからもいろいろな催しに参加して豊かな時を市民の皆様と共に過ごしたいと感じました。

編集後記

今回は、二周年記念イベントとボランティア交流会の様子を中心に編集してみました。  
(情報ボランティア)